

目次

花鳥余情	1
源氏和秘抄	389
源氏物語之内不審条々	425
源語秘訣	443
源氏物語秘決	455
口伝抄	463
解題	469

や わつかにうつほ竹とり住よしなとを物かたりとて見けん  
心ちにはさばかりつくり出けん凡夫のしわざとはおほえぬ事な  
りなといへり(いへる歌) くり事のやうには侍れとつきもせずらやま  
しくめてたく侍るは大斎院より上東門院へつれ／＼なくさみ  
ぬへき物語や候とたつねまいらせ給ひけるにむらさき式部を  
めして何をかまいらすへきとおほせられあはせければめつら  
しきものはなにか侍へきあたらしくつくりてまいらせ給へか  
しと申ければさらはつくれとおほせられけるを承て源氏をつ  
くりけるこそいみしくめてたく侍れといふ人侍れは又いま  
宮つかへもせて里に侍りけるおりさる物つくり出たるにより  
てめしいてられてそれゆへ紫式部といふ名はつきたと申  
いつれかま事にて侍らむ

順徳院御記 承久二年一切物語雖多或有事或託事也 伊勢物語  
は詞指事なけれと尤上手めき詞殊勝也 大和は無下に劣 其  
外無何物語尽も不見無其詮之故也 源氏物語不可説物也 更  
非俗人之所為 紫式部書之始一条院有御覽て不可説物也 式  
部は日本紀をこそよく見たりけれと被仰 于時左衛門内侍姤  
此論言号日本紀御局云々 誠諸道諸芸皆縮此一篇 不可説未  
層有なり 下説源氏歌は劣也狭衣歌こそ能けれと云人有と

### 花鳥余情 第一 桐壺

#### 一 桐壺

凡五十四帖の巻の名に四の意あり 一には詞をとり二に  
は歌をとる 三には詞と歌との二をとる 四には歌にも(ナシ松)  
詞にもなき事を名とせり(に松) 天台の教に四諦の法門あり  
一は有門二は空門三は亦有亦空門四は非有非空門也 一  
切の言教は此四諦に出す 是によりて故四諦外別立法性  
とも釈せり 真実の道理は言教の外にあるへき物也 此  
桐壺の巻は詞をとりてつけたる名也 源氏の君誕生より  
十二歳までの事此巻に見えたり

いつれの御時にか 女御更衣あまたさふらひ給ける中にいと  
やむ事なきはにはあらぬかすくれてときめき給ふ有けり  
此一段は発端の詞にして光源氏の母桐つほの更衣の種性(姓松・教)  
ならひに一期のやうをあら／＼しるしあらはせり 言つ

云 此条心浮浅猿事也 更非同日論 誠狭衣歌も少々不悪  
はあれとも源氏歌に不可及事雲泥也 凡歌道は知与不知水火  
者歟 源氏は第一には詞つゝ(ナシ松)き非人間所為不可説事也 第二  
歌秀逸是又何人及之 第三作様也 以虚言尽優美過之事も有  
ぬへし 但未見歌又不可説也 但是は我朝最上也 詞は更非  
人之所為物也 未知子細之輩不可弁是非歟 古今後撰為大意  
時は則一条院比と思へり 猶々非普通物歟

まやかにして旨ひろしと云へし やむことなきはきは  
めて上藤のしなをいふ 位たかき人の事はさしをかれぬ  
物なればやむ事なきはとはいへり やむの二字をやん(をは松・教)  
とよむへきなり

はしめより我はと思あかり給へる御かた／＼めさましき物に  
おとしめそねみ給 おなし程それより下らうの更衣たちはま  
してやすからず 朝夕の宮つかへにつけて人の心をうこかし  
此一段は女御更衣の中に三品の種性をわかつてり 我はと  
おもひあかり給へるといふは大臣などの女の女御たる人  
なり おなし程といふはきりつほの更衣とおなし程なる  
大納言の女などの種性をいへり 三品位松・教  
とは非参議の三位のしなゝる女なとをいふへし 三にお  
かてるにとりて桐壺の更衣は中の品也 中道をたとふる  
心は儒釈道の三教の通にもとつけり 道松・教  
心はなを／＼しるすへし おとしめはおとさむとする  
心なり (以下松ハ補心見おと教)

いとあつしうなりゆき  
きりつほの更衣いつも違例かち侍れば御いとまを申て  
母君の里へ出給ふをさとかちなるとはいへる也